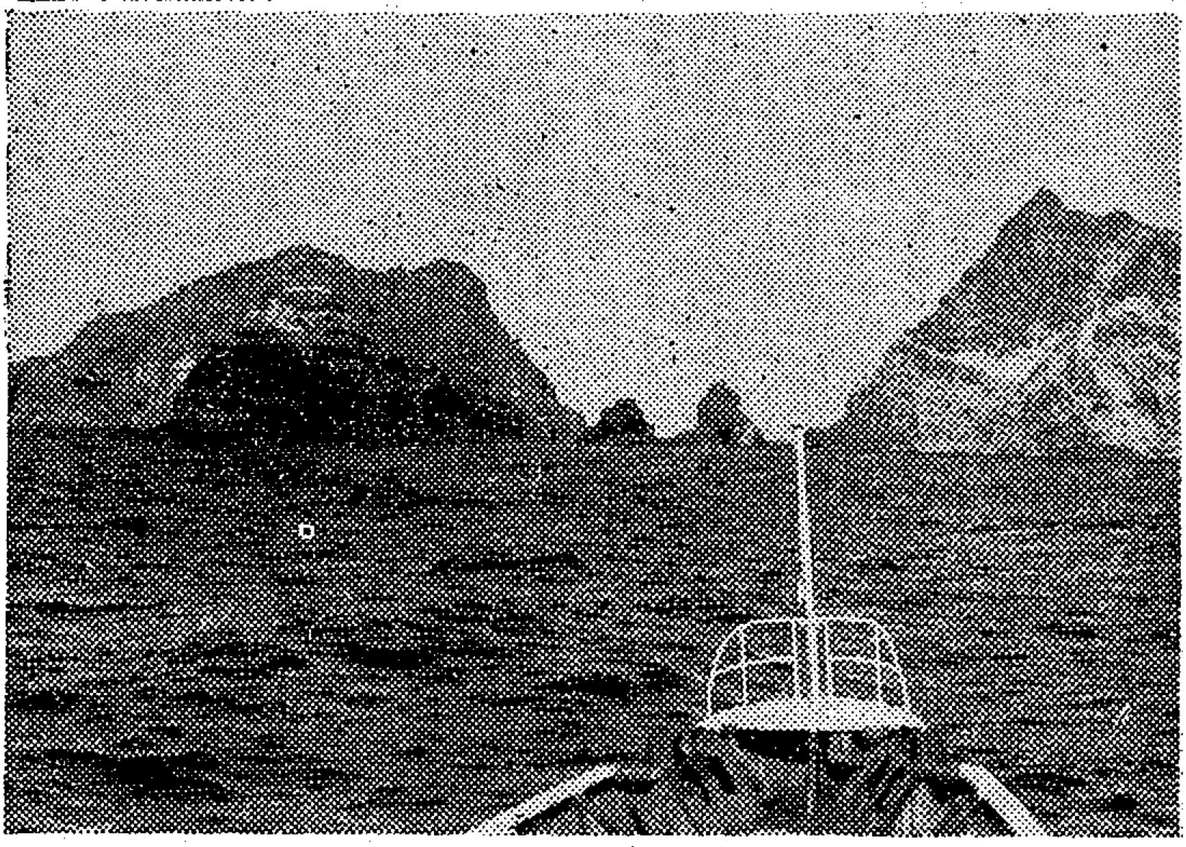

今回撮影した竹島

島の様子は全く一変

沢島根県漁政課主事、竹島から帰る

既報＝不安な空気に包まれる竹島の調査に当つた外務省川上事務官島根県漁政課沢主事の両氏は十八日隠岐西郷町に立寄り県支庁で資料調査のうえ十九日境港着、同午後三時自動車で島根県庁についた

沢主事の話　今回も同行したが去る六月行つたときとは様子が全く変つている。まず第一に島根県の領土を示す「隠岐五箇村」の標柱は抜かれており、東島と西島に七本のブリキ製測量標柱が立つているのがみえた。また何時も海ネコが多いのに東島にも西島にも一羽の海ネコも発見されず人が登つたものに間違いないと思われた。竹島東方では本県の試験船が漁法を研究中であり、この海域は将来サンマ、サバ、イカなどの回遊径路を積極的に進めようとしているので県水産当局としては如何なることがあつても引続いて漁場調査にあたる覚悟である。

なお川上事務官は同日午後県立図書館で資料調査のうえ市内皆美館に一泊し本山副知事、重田商工水産部次長などと懇談した。きよう二十日は米子市におもむく。

50年前のアシカ狩

西郷町の中渡瀬さん語る

竹島に派遣された外務省川上事務官は帰途隠岐西郷町に立寄り十八日県漁政課沢主事、隠岐支庁村上総務課長らと明治時代アシカ狩に従事した同町西郷町指向中渡瀬仁助さん(七三)宅を訪れ当時の模様を聞いた。中渡瀬さんは懐しそうに五十年前を次の通り語つた。

私が竹島にアシカ狩に行つたのは明治三十八年、当時アシカ狩は隠岐島を足場に出猟したもので、飲料水はこちらからも持つて行きまた島の出水をオケでうけ補給した。航海は風向きのよい日、夕方三、四時ごろ帆船で出発すると翌朝は竹島に着き今の変な発動機船よりも速い位なので竹島に行くことを簡単に考えていたものです。アシカは今のように生捕りせず猟銃で射止め、肉は肥料、脂肪は精製して油にし、皮は塩づけにして持ち帰つた。しかしアシカをたやさないようアシカが子を生んでしまうまでは決して射殺しませんでした。

1953年10月20日